
お礼と思春期と欲望と

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お礼と思春期と欲望と

【Nコード】

N6717D

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

日菜子の飼い（化け）猫、タマはとても義理堅い性格です。悠理君にお礼をしてあげたのですが……。悠理君は、そのお礼に困惑します。それはなぜでしょう？

(前書き)

魔法騎士としては最強レベルの悠理君も、思春期の男の子にすぎないのです。

「集会？」

「うん」

宮中、御所の一角。

普通なら立ち入ることさえ許されない場所で、水瀬はタマを相手に将棋を指していた。

猫を相手に指すのも考え物だと思うだろうが、はつきり、タマはかなり強い。

二十連敗を阻止できるかどうかの瀬戸際に、水瀬は立たされていた。

「この辺一帯の猫族が集まる集会——といっても、そんなに規模はないけどね」

「何故？」

ペチ

ペチ

歩がとられた。

「猫族は群れる存在じゃない。群れるのを逆に嫌う。だから、幹部級だけを集めるのが精一杯。50くらいかな」

「ふうん？」

ペチ

ペチ

今度は飛車だ。

「待った！」

「待ったなし」

タマは盤に視線を向けたまま、そう言い放つ。

「——ケチ。それで？」

「君の家の神社を貸して」

「月ヶ瀬神社？」

「そう」

「いいよ？何か用意する？」

「とりあえずはいいい。僕達が準備するから」

「そう。日取りは？」

「3日後の夜」

「わかった——好きに使って」

「うん。ご主人様は宮中にいないし」

「そうか」

「お礼はするよ？何がいい？」

「今のなし」

「ダメ」

チラと見た水瀬の顔に、タマは何かを思いついた様子だ。

「水瀬」

「ううっ——ん？」

次の一手を考え、水瀬は腕組みをしながらうなり続けている。

「ご主人様の何か、あげようか？」

「何でもいいよ」

そのとき、水瀬は将棋のことに頭がいっぱいで、いい加減な返事をしたのだ。

「パンツでもなんでも」

「わかった」

「うん——これで！」
ペチ

ペチ

「はい。王手」

何でこれで勝てないんだろう。

水瀬の自宅。

水瀬はパソコンを前に首を傾げた。

将棋部から借りた、最も難しい将棋ソフトのクリア画面が映るモニター。

スーパーハードモードでさえ、こうもあっさりクリアしたのに。

タマはどうしてああも強い？

水瀬はそれがひっかかった。

昨晚、神社からは夜中中、時季はずれの猫が発情する叫びが聞こえていた。

タマが何をしていたのかは聞くまでもない。

そのタマに、猫に、二十連敗するという人としての恥辱を味わった水瀬は、ここ数日、ずっとそれを考えていた。

うーん。

それがわからない。

全ての手が読まれているとしか思えないのだ。

「あの化け猫……何したんだろう」

ゴロン。

机の前にひっくり返った時だ。

ニャーッ！

タマの鳴き声が聞こえた。

「タマ？」

障子を開き、続きの部屋に入る。

そこには、タマがちょこんと座って待っていた。

「ニャ」

「ニャ」

猫族の言葉で挨拶を交わす一人と一匹。

「どうしたの？」

「これ」

タマは、尻尾で何か箱のような物を器用に引きずり、水瀬の元に近づいてくる。

「タマ？」

「昨晚のお礼」

「お礼って——いっ!？」

水瀬は、タマがひっぱってきた物を見て絶句した。

箱じゃない。

それは、引き出した。

しかも——その中身は

「タ、タマさん？質問があるのですが」
何故か、水瀬の声はうわずっている。

「何？」

「この、小さく仕切られたケースに一つ一つ収められた布は何でしょうか？」

「ご主人様のパンツ」

「……」

「君、欲しいって言ってたでしょ？何に使うかは知らないけど」

「……あれ、冗談なんだけど」

「そうなの？」

タマは首を傾げた後、言った。

「本当は欲しいんでしょう？」

「……ち、ちょっとだけ……かなり、めっちゃくちゃ……ものすごく」

「じゃ、いいよね？」

タマは大きく伸びをして、

「あ、この箱、戻しておいてね？ここまで運んでおいて何だけど」

「――えっ?」

宮中でも最重要区画の一つに指定されている日菜子の部屋。

そこからタマがどうやって引き出しを持ち出したかはわからない。だが、逆にこれに戻すことがどれほど大変かは、すぐにわかる。

こんなの、戻しにいたら、女官達に殺される。

日菜子との関係に決定的な打撃になる。

冗談じゃない!

「い、いらないから!」

「欲しいって言った」

「ホントに、ホントにいないよ! っていうか、コレ、本気で困る!」

「じゃ、とにかく戻しておいて? 僕、これからデートなんだ――じゃ」

シュンッ

タマの姿が、水瀬の前から消えた。

「た、タマッ!?」

午後のけだるい日差しが差し込む部屋。

普段なら怠惰なまでの時間が過ぎる部屋で、水瀬は青くなって叫んだ。

「だから! 僕、殺されちゃう! タマ! ぷりーず、かむばあああああ
つく!」

返事をする者はいない。

部屋には、呆然とへたり込む水瀬と、引き出しだけが残される。

日菜子の護衛として、ルシフェルがいないことだけが唯一の救いだ。

「……」

水瀬は、おそろおそろ引き出しを自分から遠ざけた。

見てはいけない。

水瀬の理性が、止める。

見てはいけない。

日菜子を本当に大切に思うなら、見てはいけない。

見たら、日菜子を悲しませる。

そう、止める。

目をつむり、顔を引き出しから背ける。

だが――

ゴクッ。

鼓動が早まり、喉が渴く。

見てはいけない。そう思うのに、体が引き出しへ向かってしまう。理性より、性的な欲望が水瀬の体を支配する。

「――うっ」

ただの布にすぎない。

そんな詭弁さえ、今の水瀬には、自己正当化の詭弁に過ぎない。

その“ただの布”は、日菜子の——恋人の下着なのだ。

いや——“日菜子”そのもの。

そう言ってもいい。

思春期街道騷進モードに入った水瀬にとっては、そういう代物なのだ。

破壊力は反応弾を遙かに越える。

「こ……これを……日菜子が」

引き出しを飾る様々な下着。

その一枚一枚を身につけた日菜子を想像するだけで、水瀬の理性は吹き飛びそうだ。

「ば、ばれなきや……いいよね？」

水瀬は自分を欺いていることにさえ気づかない。
大切なのは、目の前の“日菜子”でしかない。

欲望が——抑えられない。

遠くで、玄関が開く音がした気がした。

「え……えっと」

心臓が破裂しそうなほど激しい鼓動。
荒くなる呼吸。

正直な体の反応。

このときの水瀬は、ただの一人の少年だった。

かなり考え考えして、水瀬は一つの下着に手を伸ばした。

「日菜子……ごめんね？でも、大好きだから、だから、こうするんだよ？」

罪悪感がないといえは嘘になる。

日菜子を傷つけるような、そんな感じがしないわけじゃない。

だが、水瀬はそう思うことにさえ、快楽に近い感じを抱いてしま
う。

ペラッ

折り畳まれた布が水瀬の手によって、本来の形に広げられた、次の瞬間——。

ガラッ！

「悠理君？遊びに来ました！」

突如開かれたドア。

その向こうで、無邪気なまでの笑みを浮かべるのは……。

綾乃だった。

その視線が、女物のパンツを手にする水瀬に向けられているのは、嫌でもわかる。

心臓が停止した水瀬の前で、満面の笑みを浮かべる綾乃。

その口から絶対零度に似た声が放たれる。

「——ゆうりくん？」

この瞬間、水瀬は、人生が終わったことを察したという。

(後書き)

久々に原点回帰です。この後の展開はご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6717d/>

お礼と思春期と欲望と

2011年1月8日22時58分発行